

【平成 24 年度】

～「アルプスが育む安曇野の四季」講座～

～第 6 回～

「変わりゆく安曇野の植物」



レンゲ畑から見た常念岳

と き : 平成 24 年 8 月 29 日 (水) 午後 7 時から

場 所 : 穂高会館 第 1・2 会議室

講 師 : 飯沼 冬彦 氏

1 植物の分布の特色

日本で 5500 種 長野県 3600 種 安曇野市の維管束植物は約 2300 種

安曇野市の自生種 約 2000 種 外来種 300 種

分布型 アジア大陸と共通種

南回り型 ジュウモンジシダ ヤマウルシ

北回り型 オノエヤナギ ヒロハツリバナ

大陸共通種 クサソテツ (コゴミ)

飛び越し型 ケショウヤナギ

日本列島型

固有種 アカマツ ヤマイヌワラビ

襲速紀地域系 ヤブデマリ ツクバネウツギ

フォッサマグナ地域系 ヤマホタルブクロ フジアザミ

関東地域系 カメバヒキオコシ タマアジサイ

蝦夷陸奥地域系 シラカンバ バッコヤナギ

日本海地域系 ハイイヌガヤ ハイイヌツゲ

帰化植物

史前帰化植物 ナズナ タネツケバナ

帰化植物 セイヨウタンポポ シロツメクサ 約 300 種

水平分布 気候帯 熱帯・暖帯・温帯・亜寒帯・寒帯で分ける。

常緑広葉樹林帯 落葉広葉樹林帯 常緑針葉樹林帯 高山植物帯

照葉樹林帯 夏緑広葉樹林帯 常緑針葉樹林帯 低小草原

垂直分布 丘陵帯 (低地帯) 低山帯 (山地帯) 亜高山帯 高山帯

カシ帯 クリ帯 ブナ帯 シラビソ帯 ハイマツ帯

0m 500m 1600m 2500m

安曇野市では低山帯から高山帯まで

内陸性 (盆地性) 気候のため 海岸性の植物少ない。ブナの林も少ない。日本海型の植物も少ない。湖沼が無いので湿性植物少ない。

2 植生

自然植生 1600m 以上の亜高山帯・高山帯に残っている。低山帯は開発が進み殆どない。急傾斜の尾根筋や谷間に僅かに残る。

代償植生 500m から 1600m の低山帯では 10 世紀よりの開発で殆ど

市街地 田 畑 工場用地 屋敷林 グランド 道路 社寺林」

里山について

里山 私達の祖先は永い年月をかけて土地を開拓してきました。住むところや田畑、水路、

燃料や材を求めてきた野原や山を里山といいます。この土地は長い間、人の力を受けていました。そのため里山と呼ばれる独特な景観が作られてきました。

例えば光城山には戦国時代の城跡があります。また古峰神社が祭られ、地元の人達から大切にされてきました。大正の始めに地元の人達がソメイヨシノを植えられ、桜の名所として、市民に愛されてきました。

里山は人々の生活の支え

クリ、コナラ、クヌギ。アカマツに代表される里山は、最近山持ち農家のお荷物として放置され、かつての豊かな里山の自然の姿が急速に失われつつあります。

昔の住居域に近い里山は、人々の生活といろいろな形で結びついていました。そこは薪をとる場所、炭を焼く場所、シイタケの原木を切り出す場所、またときには、田の刈敷きや落ち葉を採取する場所というように農村の生活を支えてきたところでありました。またそこは子供たちの遊び場所であり、人々がキノコや山菜などの山の幸を求めて自由に立ち入ることのできる身近な場所でありました。

里山は草原性や雑木林の光の通りやすい林床の植物を激減させました。オキナグサ、カタクリ、ササユリ。ラン科などです。またスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツの植林、木材価格の下落は山持ちの人の生産意欲の減少、高齢化は里山の危機を迎えています。

3 田園地帯について

人力や畜力から機械化 苗造り 秋起こしの変化は水田や畑の様子を様変わりしました。

人の手による除草から機械や除草剤

肥料の変化 人糞や刈敷き、蚕尻 魚粉 油粕（菜種、大豆）堆肥から化学肥料

自然物を使う堰からコンクリートの三面堰 減反 野焼きの減少

通水の変化 田の帯水の変化 めるめ 野塚 畑の耕作物の変化 リンゴ 野菜

多様な地域 多様な植生が単純化し豊かな自然の姿の減少。

希少植物の採取 外来植物の栽培

自生種の減少 外来種の進出

田の植生はレンゲソウを肥料として使ってきた時代は五月になるとまことに素晴らしい景観を安曇野にもたらししました。秋耕起、田植えの機械化、刈り取りの機械化などは田の植生を一変させました。春起こすまでの春季雑草群落と水のある夏季雑草群落がありました。

冬季雑草群落 レンゲソウ（ゲンゲ） タネツケバナ コオニタビラコ スズメノテッポウ ノミノツズリ ノミノフスマ ツメクサ 一年草雑草群落である。

夏季雑草群落 セリ イヌビエ タガラシ ウリカワ コナギ アブノメ タマガヤツ

リ キツネノボタン

休耕田 湿田 ツルヨシ ガマ

乾田 ヒメジョオン ヒメムカシヨモギ オオアレチノギク

4 畑の雑草群落

カラスビシャク ノボロギク カヤツリグサ トキンソウ コニシキソウ オオイヌノフグリ イヌタデ イヌノフグリはほとんど全滅した。

5 川辺について

堤防の完備 ダムの整備により川が荒れなくなり、そこに生活する植物が安定化し、田園地帯と変わらない外来種の進出。セイヨウハコヤナギ ハリエンジュ ブタクサ アレチウリ ナヨクサフジ

ヤナギ林 ツルヨシ群落 アキグミ・バッコヤナギ群落 カワラヨモギ・カワラサイコ群落 カワラアカザ カワラヨモギ クララ

ハンノキ林

6 湧水地帯について

地下水の減少 水が滞留して温度が上がる。放置山葵畑の増加。水生植物の減少

ヤナギタデ カワジシャ タヌキモ ミミカキグサ スゲ属 オランダガラシ ワスレナグサ

外来種の増加 オオカワジシャ

7 雑木林（里山）

植林による減少 昭和 20 から 30 年代に植えられる。木材価格の暴落。手入れをしない。

針葉樹のため下床の植物が生育出来ない。燃料の変化 炭や薪 落ち葉 枝木からプロパンガスや電気

過っては雑木林は 15 年から 25 年くらいで伐り、萌芽更新により維持してきた。

クヌギ・コナラ・クリなどの樹種を残し、毎年手入れをしてきた。ボヤ炭や落ち葉の利用 刈敷きや屋根材の利用。

やはり手入れをしない

草原の減少 松林の更新が無い。

アカマツ林 クヌギ・コナラ林 ハリエンジュ林 ケヤキ林 ミズナラ林

シバ群落 ススキ群落 スギ林 ヒノキ林 カラマツ林

キキョウやオミナエシ オキナグサ セツブンソウ アツモリソウ キンラン ギ

ンラン シュンラン

シャクナゲ ツツジ属

- 8 社寺林 安曇野市ではスギやヒノキが植えられまた草刈りをするので植生が変化してきている。

比較的良く残っているところは穂高神社、住吉神社である。周辺の開発に伴い、乾燥化が進んでいる。

- 9 安曇野市の潜在自然植生について

500m～1000m クリ コナラ帯

コナラ林現在のコナラ林は二次林 雨量が多ければブナ林になるだろう。

土壌の悪いところ アカマツ林 ヒノキ・サワラ林

水分の多いところ ケヤキ林 ハンノキ林

1000m～1600m ウラジロモミ シナノザサ帯

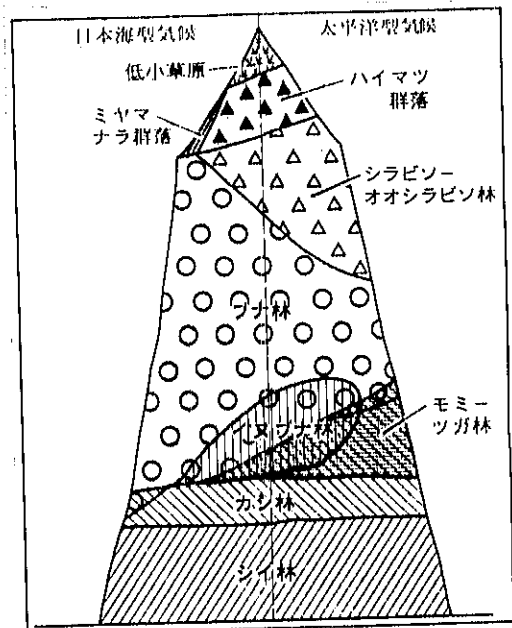
ミズナラ林現在のコナラ林は二次林

ウラジロモミ林 クロベ林 ツガ林

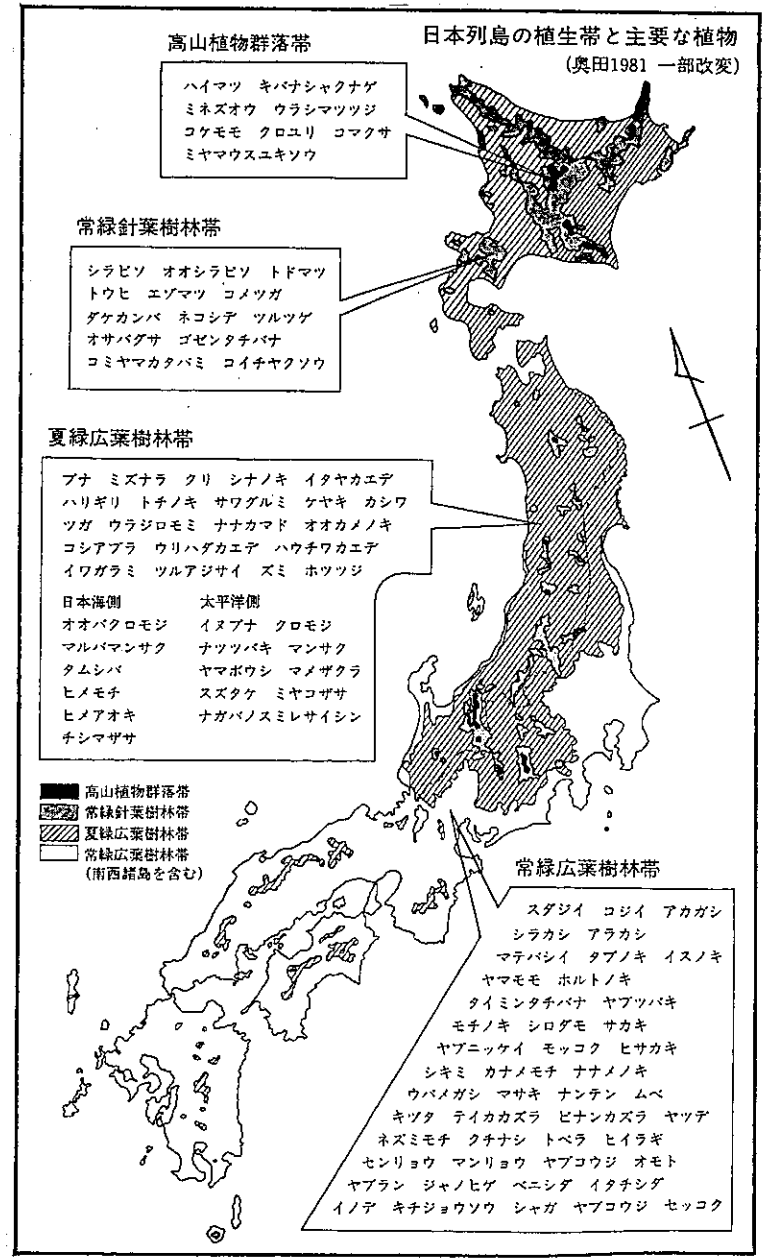
渓谷林 サワグルミ林 ハルニレ林

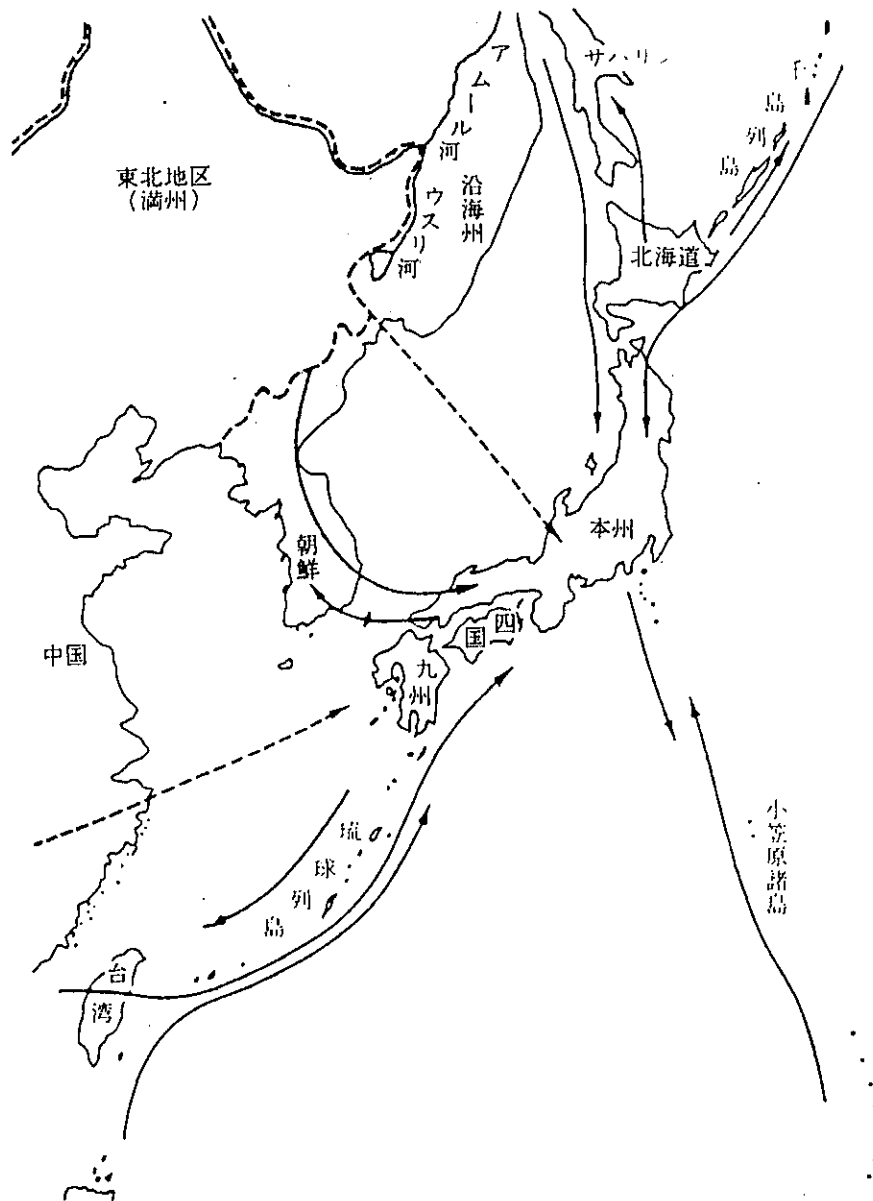
このように落葉広葉樹林の内部には、季節の変化をはっきりあらかず樹木や草本が多く生育している。美しい日本の四季を代表する森林といえる。

春はコブシや桜類・ヤマブキ・フジ 草本ではカタクリ・キンラン・シュンランなどの花が次々に咲きます。夏は深緑の野山に変わる。秋はカエデ類やツタ・ヤマウルシなどが色とりどりに紅葉し、リンドウや秋の草花が咲く。やがて冬枯れの山になる。豊かな景観と山の幸をもたらす森林である。



垂直分布の模式図





日本への四周からの植物の進入ルートを示す図(前川、1977より)